
三日間

如月 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三日間

【Nコード】

N2178B

【作者名】

如月 雪

【あらすじ】

秋は硝子を傷付けた。硝子は欲しかったものを手に入れた。愛することにより無器用な二人は、二人でいることに必要性を見い出す。秋の元彼女の存在が、二人の関係に波紋をたてる。そして、意外な運命が…

第一章 硝子と秋の物語り

私は秋が欲しかった。

何を犠牲にしても秋が欲しかった。

裏切り者だと下げ済まれても、卑怯ものだと言われても 秋が欲しかった。

第一章・嵐の夜

学園祭の打ち上げで、私と秋はサークルの仲間達と四条河原町の居酒屋に居た。

最近、芋焼酎の味を覚えた秋が真っ赤な顔で私の横に座っている。

「では宴もたけなわとなっていますが、ボチボチお開きにしたいと思います。」

男子諸君は必ず女子諸君を送って行くように。くれぐれも狼にならないように！」

部長の声に

「女子の方が怖いですよ。俺達弱いもん」

爆笑の渦の中一人一人と立ち上がって、各々の仲の良い者同士で二次会に散らばって行った。

「げー雨だよ。」

秋が空を見上げて呟く。

「お前んちまで、走るぞ。」

そう言って、私の手をとって雨筋を縫うように走り出した。

私のマンションは御池通りの一つ通りを入った所にある。

走って行くうち雨足は段々激しくなってきた。

「ちょっと待っててね。タオル出すから。」

私はマンションの玄関でずぶ濡れになった秋を残し洗面所のドアを開けた。玄関から入ってすぐ右のドアが洗面所と浴室、隣のドアがトイレだ。短い廊下の先には一人暮らしには広いワンルームがある。薄暗い玄関には脱ぎ捨てられた私のコンバースと秋の姿。

洗面所からバスタオルを取って一枚を秋に放り投げた。

硝子が寄越したタオルで頭を拭きながら、俺の視線は、硝子の後ろ姿を凝視していた。

（なんなんだ。ちょっと待てよ。コイツは、友達じゃねえか。

一緒に受験を勝ち抜いてきた戦友だろ。何ムラムラしてんだ

よ 俺は何を考えてるんだよ。）

硝子の後ろ姿が薄明かりの中で、生めかしく揺らめいている。

走ってきた体温であいつの体臭が鼻腔を擦る。

（あーやりてえ！）

（駄目だ。絶対 ダメだ）

俺の下半身は、濡れたジーンズの中でパンパンになっていた。

「キャッ」

稲光が轟音と共に硝子のシルエットを俺の網膜に焼き付ける。

その音に背中を押されたかの様に、俺は硝子を押し倒していた。
理性なんてくそくらえだ。

不意を突かれた硝子の目が一瞬、切なそうに見えた。
しかし、直ぐそれは挑戦的な険しい光に変わった。

（やれるもんならヤッテミナサイヨ。）そう言っているかのよう
に…

まるでレイプのように硝子の白シャツのボタンを引きちぎり、ブラ
ジャーを無理矢理下げた。

プルンと溢れでた乳房は、スレンダーな軀とはアンバランスなほど
豊かに揺れていた。

嫌がる様にずりあがる硝子の腰を右手で押さえて、まるで腹を空か
した赤ん坊の様にその豊かな乳房にむしゃぶりつく。

恐怖の為か、硝子の声は聞こえない。

けれど、俺がこいつの乳首を口に含んだとき、硝子の吐息が漏れた。

（感じているのか？）

（?????）

だけど、硝子の手は俺を押し返そうと抵抗している。

硝子のジーンズを無理矢理脱がせ、自分も雨で重くなったTシャツ
とジーンズを脱ぎ捨てた。

硝子は手で顔を覆い足を固く閉じている。

カーテンの隙間から稲光が二人の躰をフラッシュの様に浮かび上がらせる。

秋が獣になろうとしている。

背後に目があるように秋の心が透けて見える気がした。

・・欲望と理性の攻めぎあい・・

後少し何かがあればちっぽけな理性なんて吹っ飛んでしまうだろう。

その時、悪魔が味方をしたかのように雷鳴がなり響いた。

何も言わず、私の両手を押さえ付けて恐い顔のままキスをしてきた。

秋のざらついた舌が、唇を割って入ってくる。

思わず、反応しそうになる自分を抑える。

からだの中心が、熱い。

秋の右手が足の間に割り込んで来た。

必死で閉じようと躰が反応してしまう。

こんな時、どうしても心と躰は一つではないのだろう。

こんなにも待ちわびて歓喜の声をあげそうなのに：

秋に初めて逢ったときから欲しくて欲しくてたまらなかったものが、

直ぐそこにある。

なのに、意に反して私の躰はこわばっていた。それは初めての
ことへの恐怖なのか。

それでも、私の躰は何も要らないくらい潤っていた。

（どうしよう。秋に判ってしまう。）

案の定、私の足を割って入ってきた秋の指は一度躊躇し、そして意を決したかのようににはち切れそうな秋の欲望を一気に貫いた。

「ぐっ」

躰を引き裂く痛みに躰が逃げようとずりあがる。

秋が動いたびに頭に突き抜ける痛みに声が出そうになる。

耐えきれず手を伸ばした先にあった布を、握り締めていた。

あともう少し・・・あと少し・・・

歯を悔いしばった私に荒々しくキスをして、秋が私の中に果てた。

私の上にどれぐらい突っ伏していただろう。

秋の体臭が、また私に興奮を与える。

人の温もりがこれほどやすかぎを与えるのか。

大きなため息を突き私の上から離れ、横に並んだ。

（何か言わないとイケナイノダロウか？）

私は無言で湿ったバスタオルで汚れた体を拭いた。

そして秋の顔も見ずにクローゼットから新しい下着とスウェットを持って浴室に入っていた。

私は一体 どんな表情をしていたのだろう。

怒り？

屈辱？

それとも笑みか？

私がシャワーを浴びている間に、キット彼奴は出ていく。

秋は、私に負けた。

そして何も無かった様に明日が始まるのだ。

泣き叫びもせず、罵りもせず何も言わず、淡々と着替を持って浴室に消えた硝子。

その後ろ姿を見て俺は息を呑んだ。

内股にうっすらと紅い筋が見えたのだ。

（マジかよ。初めてだったのかよ。）

レイプなんてしたことなんて無かったし、しようと思ったことも無い。

女に不自由したことなんて無かった。やりたければ声を掛ければ澄むことだった。いつでも付いてくる女なんてさらに居たから・・
だけど、これはれっきとしたレイプだよな。

・・・初めてがレイプだなんて・・・

もし、あいつが泣き叫び抵抗していたら俺は止めただろうか。
多分踏みとどまったはずだ。

其ぐらいの理性は持ち合わせている。不意打ちだったとはいえ、何
度でもその機会は有ったはずだ。

男の嫌らしいエゴかも知れないが、アイツは感じていた。

何も要らないほど濡れていた。

だから、まさか処女だとは思わなかった。

・・・あー俺言い訳してるよな・・・

(誰に対しての言い訳なんだよ...)

アイツの中はマグマの様に熱くそしてきつかった。

何度も何度もいきそうになる自分を抑えた。

堪らないぐらい良かったのだ。これさえあれば何もいらなと思え
るほど良かった。

今までそんなに何人もの女を知ってるわけではないが、それ相応に
は知っているつもりだ。中学三年で女を知って、年上の人とも何度
か肌を合わせた。確かに経験が豊富な人はHが上手かったが、ここ
まで感じたことはなかった。

この快感がずっと続けば良い。すぐに終わらせるなんて出来なかつ
た。

けれど、俺の下で苦痛に顔を歪めている硝子を見ると、この綺

麗な顔をもっといじめてみたくなって、もう我慢が出来なくなってしまうた。

後先の事も考えずアイツの中に果ててしまったんだ。

やっちまった。

やっちまった。

俺の下で硝子の鼓動が早鐘のように打っている。

泣かれるか？

蔑まれるか？

けれど、硝子は何も言わない。

こんな時何を言えば良いんだよ？

高校だって予備校だって教えてくれなかった。

謝るべきか？

いや、こいつも感じていたはずだ。

わからない。

数三の方が簡単だぜ。

第二章 嵐の後

案の定、部屋には誰も居なかった。

濡れたTシャツとジーンズはそのまま、ベッドの上に畳んで置いていたパジャマ代わりのUNIQLOのスウェットがなくなっていた。

（まあいいか）

これで秋とは終りだ。
アイツが壊した。

けれど、アイツのせいだけではない。私がそう仕向けたのだ。
アイツは自分の欲望に負けて、私は勝った。
これが最初で最後の、秋との H

自分の思った通りに、初めての男は秋だった。

考えていた以上に、痛かった。女になるための儀式。
本音を言おうと、もう少し していたかった。
少しずつ痛みは薄らいできていたから。

でも、仕方ない。

秋は 多分ここ一年近く禁欲生活をしていたはずだから。

ソファーに座ってドライヤーで濡れた髪を乾かしている時、ガチャっとロックが外れる音がして玄関のドアが開いた。硝子の目に恐怖が宿る。

・・・しまった。ロック忘れてた・・・

「まだ結構降ってるぞ。」

濡れた傘を持って、秋が玄関に立っている。

何もなかったかのように、コンビニのビニール袋を持って、いつものアイツがそこにいる。

ドライヤーを手に、ソファーに腰掛けていた私の思考は固まってしまっていた。

そんな私に意ともせず、袋から缶ビールとペットボトルのお茶、サンドイッチやおニギリ、ポテチなどのお菓子を出してローテーブルに並べている。

「腹減ったろ。酒ばかりだったからな。適当に買ってきたから好き嫌い言うなよ。」

そう言って缶ビールのプルトップを開けた。

「ど・どうして・・・ここに 居るのよ？」辛うじて声が出た。

「あゝ電車なくなったし、雨も降ってるし、今夜泊まってもいいだろ」

うまそうにビールを飲みながら、まるで男友達の英明に話しているように秋は答えた。

長い足を投げ出して、寛ぎモードに入りテレビのスイッチを入れる。

（何なんだ？こいつは何を考えてるんだ？）

想定外の事態だ。

何度も、何度も考えて、ようやく頭が動き出した。

（そうだ。キット何も無かったことにするつもりなのだ。リセットしたつもりなのだ）

そうとしか考えられない。秋はまだ友人としての硝子を放したくないんだ。

自分に無理やりそう納得させたのに・・・

「怒ってるのか？」

秋が真面目な顔で、私を見つめる。

（ちょっと何も無かったことにするつもりなんじゃないの？）まただ。また予測出来ない。

何だか無償に腹が立ってきた。

「怒られるようなことしたの？」
口調がいつもの私に戻っている。

「いや。悪い事をしたとは思っていない。」
突き放すように、感情のこもっていない言葉を投げつける。

いつものあの冷たい秋だ。
・・・ゾクゾクする。

「そう　じゃあ良いんじゃないの？　悪い事をしたつもりは無い
んですよ。」

いつもの秋がいた。

私の好きな秋がいた。

第三章 出逢い

「篠原 秋」

あいつが転校してきてから、私の生活が一変した。

「ねえねえ。硝子。やっぱりあいつ変だよね？」美夏が耳打ちする。

「うん。こんな時期の転校生なんてね。訳有りなんじゃないの？」
お弁当をつつきながら、コソコソ話していた。

いつもはもう2人横にいるのだが、香音はコンクールが近いからと
昨日から欠席だ。

東京のバイオリンの先生に、個人教授を受けている。

もう一人

英明は、食べかけの弁当を開いたままどこかへ走っていった。また、
担任の大河原に思いついた計画を直訴しに行ったのかも・・・

「おいおい。硝子。美夏。あいつ・・・あっあっ・・・あいつ・・・」英明
が後ろの扉から駆け込んできた。

多分、職員室から全速力で走ってきたのだろう。さすがのフルバツ
クも息が上がっている。

「落ち着きなさいよ。何言ってるかわかんないでしょ？」
美夏が、ペットボトルのお茶を手渡した。

「わかってるって。」

篠原ってN高からの転校生らしいぞ。」

「えー N高って あのN高？」

「そうそう。あの超難関進学校!!」

「ひえー。けど、なんでそんな賢い奴が、うちみたいな田舎に来るのよ?」

「だろだろ? 俺もちょっと気になってさ。大河原に聞きに行ったんだよ。」

そしたらさ、職員室から聞こえてきたんだけど・・・」

「聞こえてきたんじゃないでしょ。聞き耳を立ててたんでしょ?」

「まあーそうとも言う。そんなことより、あいつの編入試験の点数、何点だと思う?」

英明が得意そうに、満面の笑みをたたえたいる。

「何と、五百点満点中・・・四九八点!!!!」

「「ええー!!!!」」私と美夏はハモッテしまった。

「だろだろ? 驚きだろ? ふふふふ」何で、英明が得意そうなのよ?

「でも、その二点も気になるよね」

「うんうん、気になる気になる。だって、うちだって結構難しいでしょ? 県下二番目の進学高なんだから。入試でも難しいんだから、編入となるともっと難しいでしょうが?」

「ふふふ教えてシンゼヨウ。長文の英作で単語のoとaを間違ったんだって!!!!」

「化け者だわ!!!!」

「えーそれって、普通はまけてくれるでしょ? 多分aって書いてたはずよ。単語自体はあってるんだから。私だったら、文句言うよ!!!!」

「英語の三ツ屋も、百点取らせなくなったらしいぞ。プライドあるしさ。」

秋は今も、窓の外を眺めながら文庫本を開いている。さっきからページは進んでいない。読んでもいないのに、読書モードに入っている。

要するに、「俺に関わるな」オーラが出ているのだ。

さらさらな少し長い目の髪の毛に日が当たって少し枯葉色に見える。切れ長の目はいつも冷たい光を宿している。自己紹介の挨拶の時の笑みは、口を少し曲げただけ・・・

・・・冷たそうに見えるその容姿の下に、何が隠れているんだろう・・・

秋が 欲しい

それから、私の生活が秋を中心に初めて回りだした。

あいつはキット東京か京都に行くだろう。
同じ大学に行く為に私は猛烈に勉強した。勿論、周りには悟られずに・・・

英明の、人懐っこさがなぜか秋と波長が合ったらしい。
着かず離れずにいた私達四人の中に、秋が入ってきた。

冷たい秋

暖かい英明

優しい美夏

美しい香音（実は 怖い）

そして 私

「なあ、硝子。お前、大学何処にする？」秋が前のイスに座って私の机に頬杖をつく。

「うーん、センター次第だけど多分、京都」

（やはりどんなに頑張っても東京は無理みたいだ。 悔しいけど）

「そうか。じゃあ俺も、京都にするわ」

「えっ！ 東京に行くんじゃないの？ 教頭泣くよ！」私の心臓は、バクバク言っている。

「だって、お前が京都に行くんなら、そっちのほうが面白いじゃん。英明も美夏も こっちに残るんだし——」

「でもさ、大学へ行っても秋のお守は・・・ねえ・・・」もうそれだけで、私の熱は上がっていく。
冷静を装うのが 辛い。

「でも、京都にするんなら 彼女喜ぶんじゃないの？」

秋の顔が 歪んだ。冷たい仮面を被った。

（ あーー ゾクゾクしてくる ）

「大学まで行っても子守りは、勘弁してくれよ！」ダルそうに吐き捨てた。

「もしかして、もう別れるの？」

秋は二年のバレンタインから、一つ下の安奈と付き合っている。

安奈は、テニス部のマドンナ。滅茶苦茶可愛くて、男が守ってあげたくなるような女の子。

確か、秋と付き合う前はサッカー部のキャプテンと付き合っていたはずだ。

・・・2月14日・・・安奈は秋に 告った。

「付き合ってください。私のことが嫌いですか？」

「別に・・・」

もうそれだけで、安奈は秋と付き合っていると誤解した。

——自分に告白されて、断る男なんていない——と言うのが彼女の信念なのだ。

周りの友達に、篠原先輩と付き合っている・・・と公言した

また、秋も否定しなかったから、既成事実として捉えられていた。

多分、否定することすら邪魔くさいからだ。泣かれることすら 煩
いからだ。

私は、その状況を楽しんでいた。安奈を自分の支配下に置いたのだ。
「私は貴方の味方よ」・・・という顔をして彼女に近付いた。直ぐ
に彼女は私の手中に納まった。

秋との一部始終を報告してくる。どうしたら良いかと聞いてくる…
そのたびに的確な助言を与えてやると、彼女はまるで子犬のように
シッポをふって付いてきた。

「硝子 また来てるよ。彼女。 ねえ？硝子ってレズっ気あった？」
口の悪い香音が 廊下にいる安奈を見て耳打ちする。

「バカなこと言わない！ キット秋のことだから。所で秋は何処？」

「さっき生徒指導室に呼ばれてたよ。また煙草見付かったんじゃないの？」

美夏が心配そうに答えた。

「ホントに アイツは利口なのか馬鹿なのか…」

第四章 出逢い2

私は屋上への階段を上がって、丁度 校舎から死角になる場所に行った。

「やっぱりココにいたんだ。あの娘捜してたよ。」

「もう 良いって：そろそろ 諦めてくれないかな」そう言っ
て小さく白い煙をはきだした。

先ほども生徒指導室で説教を受けていたはずなのに、懲りない奴。

「それはそうと、お前、彼女に入れ知恵してないか？」

「なっ何をよ？」急に痛いところを指摘されて私としたことが、し
どろもどろになってしまった。

「ヤッパリな。道理で俺と合うじゃんって思ってたんだよ。初めの
印象と違うんだなって。ハハア 納得納得！お前の差し金かぁ」一
人で納得して悦に入っている。

「最初の印象はどうだったのよ？」

「えーまあかわいいし、悪い気はしなかったよ。けど、人形みたい
だし、ちやほやしないといけな そうな感じだったから・・・けど、
結構サッパリしているし音楽や本の好みも合うから、人は見掛けじ
やないんだなって思ってたんだよ。そうか・・・そうか・・・よし！
これで別れる口実が出来た」

旨そうに煙草の煙をはいていた。

「今 生徒指導部で絞められてきたんでしょ。アホになるよ。」

「ちよっと位バカになっても、大学位入れるさ。」

「オッ 天才は言うことが違うね！」 皮肉を込めて軽口を言う

「所で 硝子？お前俺が京都にするって 彼女に話した？」

「まさか。あんなこと言ってたって篠原は東京でしょうが。教頭も担任も泣くよ？」

今年は東京一人は確実にだって喜んでいたよ？」

「ハハハ。そろそろ願書出さないといけないだろ？ だからな・・

お前は何処か聞きたいんだよ。」

「昨日親とも相談して、京都に決めた！」

「そっか じゃあ俺もそうする！」

「学部は？」

「経済 篠原は？」

「法学部」

「えー理系じゃないの？数3取ってるじゃないの？」

「それはお前もだろ？ 前の学校で数2迄終わってたからな・・・

それに・・お前はどんなんだよ。てっきり医者でも目指してるのかと思ってたよ。」

「私は元々文系。 だけど数学だけは好きなの…教科決めるとき大河原に大分説教されたけどね」

俺は硝子が数3を取ると知ったから、受験に不必要なこの科目を選択していた。

――この高校へ来て初めての小テストで俺は硝子に負けた。

こんな田舎の高校なんて馬鹿にしていたのだが、得意の数学で不覚を取ったのだ。

舐めて掛かっていたっという点を差し引いても、まさか女に負けるとは思わなかった。

あいつは100点俺は98点だった。

それから、あいつのことが視界に入ってくる。

優等生か？と思えばそうでもなく、嫌いな教師の授業はふけたり、英明や美夏とふざけあったりしている。何処か予備校にでも行っているのかと思えば、帰りはクレープ屋で遅くまでしゃべっていたりする。

あいつは 一体 何なんだ？？

いつも 俺のことを 見下している気がする
初めてだ

こんなに腹が立ったのは・・・

第五章 三日間の始まり

結局 秋はそれから三日間私の部屋に居続けた。

・私にとっては楽園・

長い間 欲しかったものが すぐ手の届くところにある

俺達は朝方 もう一度Hをした。

TVの深夜番組では、古い仏映画をしている。

元々 酒に弱い硝子はソファアの上でウトウトと浅い眠りに入っていた。

・コイツ睫毛長いんだな・

口が少し開いて まるで誘っているみたいだ。

そう言えば、昨日 先輩が言っていたな

徹夜で論文を書いていると 無償に女を抱きたくなる。

体は無茶苦茶疲れているのに、頭はギンギンに冴えて血液がそこに集中するみたいだと――

――今 それを実感していた――

ゴクリと硝子の喉が動いた

・・・こいつ・・・起きていやがる・・・

起きていて俺を誘っているのだ。やってくれるじゃないか・・・

もう どうにでもなれ お前の企みに乗ってやるさ

間にあったテーブルを押し退け ソファーの上に硝子を組み臥せた。
た。

スウェットを巻くしあげ下着の中に手を入れる。
数秒で硝子の体は何も着けていない状態になった。

カーテンから漏れる朝日の中で、硝子は綺麗な体を投げ出している。
る。

俺は思いきってカーテンを全開にした。 眩しい光が部屋の隅々まで映し出す。

既に裸になった俺は硝子の上に乗しかかった。 キック目を閉じている氷の様な少女

さつきは自分の欲望を晴らすことしか頭になかった俺は、硝子を感じさせようと挑んだ。

閉じた瞼に優しくキスをして ついばむように頬に、耳に、唇に口づけをする。

固かった体から力が抜けていくのが、解る。

左手で硝子の乳房を揉みくだき、右手はキック閉じた足の間に滑り込ませた。

硝子のそこは、すでに溢れていた。

「硝子。お前 俺を待ってただろ」
意地の悪い言葉が吐き出される。

（どうしたんだ？・・・）

冷たい奴だと自分でも自覚していたが、人を傷つける言葉は今まで言ったことなどなかったのに・・・

何気ない言葉で相手が傷つくことはあっても、自分から傷つけようと発した言葉はなかったはずだ

・・・なのに・・・

下から強い光を宿した二つの瞳が俺をにらんでいる。

・・・ああ・・・この瞳だ・・・対抗意識剥き出しのこの強い瞳が俺を欲情させる

冷たい手で頬を撫でられたように 俺の中心はゾクゾクしていた。

「馬鹿じゃないの？女なら誰でもすりよって来るって思ったら大間違いよ。やりたいのはアンタでしょ。欲しくて欲しくてたまらないんですよ」

ムカついて滅茶苦茶にしてやりたかった。

硝子の言ったことは、確信をついていたから。

マジで欲しくてたまらないのだ。

悪魔と取引きしても、コイツの体が欲しい

その悪態をついている唇を痛いほど吸い、舌と舌を絡ませる。
口では俺をさげすんでいるが、体は正直だ。すぐ反応してくる

・ ・ ・ あっ ・ ・ ・ ン ・ ・ ・ ん ・ ・ ・ あ ・ ・ ・ ・ ・

硝子の口から、吐息が漏れる。

熱く溢れている火口に舌を這わせる ・ ・ ・ そして ・ ・ ・ 中指を挿入した ・ ・ ・

二度目とは思えないほどの吸着力

俺の今までの経験とA Vで学んだ全ての知識を持って硝子に挑んでいた。

硝子の体がのけぞり、初めて昇りつめたのだ。

目の前が真っ白になり、生まれて初めての感覚

これが ・ ・ ・ 女になる ・ ・ ・ ということか ・ ・ ・

それから私達は何度セックスをしただろう。まるで盛の衝いた獣の
ように ・ ・ ・ ・

ベッドで ・ ・ ・ ソファで ・ ・ ・ 浴室で ・ ・ ・ ありとあらゆる場所で秋
は私を求めた

秋の発達した上腕 ・ 分厚い胸板 ・ 割れた腹筋
服を着ていると華奢に見える彼の引き締まった躰

今は全てわたしのものだった

その全身を使って戦いを挑んでくる。

シャワーの水流の中で、真っ暗な闇の中で、飽きることなく秋は私を求めた。

そのたび、私の躰は初めての感覚を、悦びをしっていく。

もう言葉なんて要らなかった

このまま地球が滅んでも良い

第六章 硝子の湖

シーツを握り締め、声を我慢している。

そんな硝子の顔を見ていると嗜虐的な感情が無性に湧いてくるのは、俺にサディスティックな裏の顔があるからなのだろうか？
こんな感情は、硝子に対してしか生まれえない。

硝子の氷のような瞳に見つめられると、俺のその感情が吹き出してくる。

硝子の抑圧している甘美な快感を出してみたい。

左の乳房を口に含みながら、舌で突起をコリコリと転がす。

右の突起を右手でつまんだり、円を描くように愛撫する。

「・・・あん・・・ん・・・あっ・・・」

必死で喘ぎ声を我慢している硝子

苛めたい・・・

右の指は、硝子の熱い谷に飲み込まれる 一本・・・二本・・・

「・・・う・・・ん・・・ん・・・いや・・・だ・・・め・・・」

くの字に指を折ると、硝子の身体がビクッと跳ねた

（いきそうだな。 今日は何度目なんだ？）

俺の体の下で、とろけるような表情をするようになった硝子
十分堅くなった欲望が その中に飲み込まれていった。

今まで付き合った女とのセックスでは これほどの快感を味わったことが無い

硝子の身体はすごく甘い。たまらないぐらい良いのだ。

これさえあれば、何もいらなそうと思わせるほど あいつの身体はいい。

果てた後でも、あいつの中にとくと、すぐ堅くなる

これが女に溺れると云うことなのか？

硝子の身体は、俺にとって麻薬のようだ

・・・俺は、硝子という湖に沈んでいくのかも知れない・・・

秋の欲望は絶える事が無かった。私は男の体を嫌と云うほど思いらされる。

（女がどんなに強がっても太刀打ち出来ないことに・・・）

私が秋を征服することなど、到底無理なのだ。

そもそも男の躰は攻撃的に出来ていて、女の躰は受け止めるためにあるみたいだ。

どんなに強がっても男性に庇護される安堵感、やはり女だけに許された特権なのかも知れない。

私が秋に戦いを挑んでも、秋は平気な顔をして私を征服していく。

第七章 秋の朝

三日間というものの、私は一度もドアの外に出ていない。

秋は一度買い出しに出かけた。

あまりに帰りが遅いから、少し心細くなりかけたころ、着替えを持って帰ってきた。自分のマンションに取りに帰ってきたらしい。

三日の間、宅配ピザやお寿司を取って狭い部屋で、二人きりの濃厚な世界。

その間に 私は何度 快楽の泉に溺れただろう。

久々に見た朝日は、とても眩しく新しい世界に紛れ込んだのかとさえ感じた。

百万遍の通りを歩いていると

「おはよう。硝子」友人たちが声を掛けてくる。

隣を歩いている秋は、イヤホンを耳に独りの世界に浸っている。

こんなところは、以前のままだ。俺に近寄るなオーラが出ている。

硝子に声を掛けてくる女の子の何人かは、いつも一緒にいる秋に話しかけたくて、うずうずしている。

人見知りの激しい秋は、大学でも余り友人を作らない。サークルだって 私が無理矢理入らせたようなものだ。

「なんか硝子、雰囲気変わったね？髪型かな？」

鋭い！

「うん チョット変えてみたんだけど 変？」

「ううん。似合ってるよ。」

今まで伸ばし放題だった髪を 少し巻いてみた。

・何だか女の子の子として嫌だったんだけど、秋が似合うと
呟いたから・

あれから、一週間が過ぎた。

俺は、気が付けば硝子の姿を探していた。

図書館で分厚い本を何冊も置いて、一生懸命調べものをしている硝子。

中庭で友人を待っている硝子。 大学内のカフェで本を読んでいる硝子。

いつの間にか硝子の姿ばかり追っている。

俺の下半身は硝子の事を考えるだけで 張りつめ、抑えるのに大変だった。

まるで、パブロフの犬状態。

昨夜はイライラして、バーで独りで呑んでいた。

隣に座ったOLが誘って来たから乗ってみたが、俺の体は冷めたままだった。

モデル並の長身でクールな美形の男を、女が放っておくはずはないのだ。

彼から滲出る妖艶なフェロモンは雌を惹き付けずにはおかない。

けれど、いざ肌を合わすと根っからの冷血感が顔を出し 熱くなら

ない。

Nice Bodyな頭の悪そうなそのOLにも、それはわかったらしい。

「良くないの？」

行為の最中にそんなこと聞くのは、美しくない。

俺は 入っていたものを抜き、「ああ」とだるそうに答えた。

バンつと枕が顔に当たる。

「最低」

そう叫んでその女はホテルの部屋から出ていった。

- ・俺は何をしてるんだよ・・・
- ・硝子の変わりなんて誰もいないんだよ・・・判っているのに・・・

秋が私を視ていることは、充分わかっていた。あんなに熱い視線に気付かない程、鈍感ではない。

けれど、敢えて無視をした。視線を絡めてしまうと私は我慢出来なくなる。すぐにでも、抱きつきたくなる。大学であろうが、中庭であろうがお構いなく秋の唇に引き寄せられてしまう。

見つめられるだけで、潤んでくるのだから・・・

それから二週間が過ぎた土曜日に、秋はあの雨の日に借りたままの鍵は使わずに、私の部屋を訪ねてきた。

ーピンポーン

「ハイ」 躊躇せずにドアが開いた。

まるで秋が来ることが判っていたかのように・・・

「あら？ 久しぶりじゃない。どうした？」

以前と同じような硝子が、こっちの苦悩も知らずに無邪気な笑顔を見せた。

何だか自分独りが、バタバタと一人相撲を取っていたみたいで凄く腹が立った。

「ああ。近くへ来たから どうしてるかな？ って思ってたな。」 見え見えな言い訳だ。

「入っていいか？」

「うん。 もちろん。どうぞ」

やはり、今までと違う。

二人の関係は、前のような友情だけでの繋がりではない。

肌を合わせた者だけにある親密感が何処かに見えるのかも知れない。秋は違和感を感じていた。さっきから感じていた違和感の正体は、硝子の姿にあったのだ。

元が良いのだから化粧をしたり、女の子っぽい格好をすればいいのにと周りから言われていたが、いつも少年のような姿ばかりだった。上はラフなシャツかジャージで下はいつもジーンズだった。長い髪の毛も無造作に一つに纏められている。

そんな硝子が今は、胸の開いた黒のセーターとミニのチェックのスカートをはいている。

俺は、そこから見える白い肌に釘付けになってしまった。

・・・やばい・・・鼻血出そう・・・

本心を悟られ無いように冷静を保って持ってきた紙袋を差し出した。

「これ。差し入れ」

「わお これって菊の井の桜花堂弁当じゃない。 どうしたの？」

「ああ、バイト先のお客さんに貰ったんだ。」 これは嘘だ。

「へえー ラッキー！じゃあ、これ開けよう！」硝子は、冷蔵庫からワインを出してきた。今年のボージョレヌーボーだ。

「オッ ワインじゃん。どうしたんだよ？」

「うん バイト先の親に貰ったんだけど、開けても一人じゃ飲みきれないからさ。丁度良いよね？」

これも嘘だ。

お互いの嘘なんて、見破られている。

見破られていることも、知っている。

テーブルにワイングラスと桜花堂弁当を広げて 先ずは乾杯！

「ヤッパリ美味しいね？」 「ああ コンビニ弁当とは違うな！」

「当たり前でしょうが。あーあ。一度 ちゃんとした懐石食べたいな」

せつかく京都に居るんだからさ」

満足そうに宙を見上げる。その仕草が、とてつもなくエロティックに見える。

硝子の部屋に入った時から、硝子の白い鎖骨を視たときから、俺の半身はビンビンに張りつめている。

美味しい海老も鰯も 硝子の味には敵わない。

・ ・ ・ ほしい ・ ・ ・ 欲しい ・ ・ ・ ホシイ ・ ・ ・ ・ ・ ホシイ ・ ・ ・

・ ・ ・ 欲求不満のオヤジかよ ・ ・ ・ 俺は ・ ・ ・

満腹になった硝子は、グラスを持って窓の外を見ている。夕闇の中に、街の灯りが夜で在ることを忘れさすようだ。

前のビルからの光が、硝子の顔を照らし出す。

堪らない・・・抑制が効かない・・・

「ナア？」

「ん？」

「抱きたい」

一瞬の沈黙のあと、硝子が悪態をついた。

「バツカじゃないの？」窓際から氷の瞳で俺を見下す。

ガツとテーブルを跨ぎ、硝子を後ろから抱き締められた。

「何するのよ！」羽交い締めになれ、抵抗する。

・・・振りをする・・・

うなじに唇を這わすと、硝子の体から力が抜けた。

「・・・あっ・・・」

抱き締めた手はセーターの上から両方の胸を揉み砕く。

・・・だ・・・め・・・

「硝子 外から丸見えだぞ。 お前の悶えている顔 見せてやれよ。ん？」

何だか まじで変態親父みたいじゃねえかよ

・・・違う・・・俺は・・・こんな・・・

右手は硝子のスカートの中に入っていた。

下着のラインを指でなぞる。硝子の躰がピクピクと跳ねる。

薄い布の上から その蕾を指で押すと、グチュっとした蜜の感触が

した。

「フフフフ やっぱりな。もう グチュグチュだぜ。 そんな澄ました綺麗な顔してるけど、体は俺が欲しいって泣いてるぞ。お前・淫乱なんじゃねえか？」

下品な言葉が次から次へと出てくる。

・俺はどうなってるんだ？・

必死で凜とした姿勢を保っている硝子を見ると、無性にいじめたくなる。

「ほら どうして欲しいのか言えよ！ん？」そう言いながらうなじに舌を這わせ、両手は胸の突起とツ蜜壺の中をかき回している。

・馬鹿だ・俺は何て馬鹿なんだ・

此処へ来たのは、こんなことを言うため何かじゃないのに・

もっと 素直に想いを伝える為に来た筈なのに・

陵辱の言葉が 硝子の耳に突き刺さる。

・そうよ・待ってたのよ・我慢出来なくなりそうだったのよ・
秋の言葉は、確信を突いていた。

硝子が不意に体を沈めたかと思うと、秋のジーンズのアスナーを下げ、トランクスの中から痛いくらいに体積が膨張していたモノを

口に含んだ。

「ウツ」

これが硝子の答えだ。

俺が要求しなければやらなかった行為を自ら始めた。

まだ、ぎこちなくどうして良いか判らないみたいだが、硝子の舌が触れるたび、直ぐにでも頂点に達しそうだ。

「・・・はぁ・・・」

主導権を取られないように ジーンズから足を抜いて秋は硝子を抱き上げた。脇と膝に腕を入れ 抱き上げられた硝子は 怖い顔をした秋を下から見上げている。

ベッドに投げ出され、弾みでうつ向いてしまった硝子の背中に、秋の舌が 冷たい鞭のように舐めあげる。

「ヒャー」

すでに 体を被っていた布は取り払われビーナスのような裸体を晒している。

ライトに照らされた硝子の体は しつとりと湿り気をおびていた。

俺の愛撫に依って感じていた証拠

どんなに強がっていても 体は正直に応える。

溢れだした谷間を執拗に 舌と指で責め 言葉で凌辱していく。

・・・俺の醜い裏の顔をさらけだして・・・

硝子の清らかな顔の裏に潜む淫靡な顔を引きずり出して・

硝子の口から 甘い切ない声が漏れる。

「あっ・ん・い・ん・い・ん・」

普段なら絶対に 口にしないような 女の声

クチュクチュとひわいな音が 部屋に響く。

「硝子 凄いぞ いったいどれぐらい濡れれば気が済むんだよ？
ん？ グチュグチュだぞ！ ほら」

谷間から引き抜いた指には トロトロの蜜が掌まで伝っている
その蜜を舌で舐めあげる秋の瞳は、妖しく妖艶な光をたたえていた。

「ほら どうしてほしい？ 言わないとやってやらないからな！
言えよ！」まるで AV男優の台詞じゃないか・

もう 堕ちる処まで堕ちてやるさ・
・一連托生だ・

「お・ね・が・い・ん・ん・ん・」切なそうに 懇願する硝子

無茶苦茶にしてやりたい。

一度硝子が昇り詰めたあと、グツタリしているアイツを浴室に連れていった。

硝子の体を綺麗に洗ってやると、また彼女は感じ始めた。身体中が
敏感になりちよっとの刺激でさえ、悶えはじめる。俺は、ニヤリと
笑っていた。 自分でも嫌らしい奴だと思う。

立ったままの硝子の耳元に「立ったままでいろよ。」と囁く。
その息だけでビクッと硝子の躰が震える。

後ろから胸を持って遊ばれ、下の蜜壺では二本の指が執拗に掻き回す。
洗った後の内股には、溢れでた蜜がたえまなくつたっている。

快感で崩れそうになる硝子に、

「立っていないとやってやらないぞ」と嫌らしく言い、後ろから
蜜壺に突き上げた。

・・ぐっ！・キツイ・・ヤバイ・・出してしまう・・

俺は挿入して二回程動いただけで、射精感をもよおした。

・まだだ・・とおもうまもなく、硝子がキューと締め付ける。

・・ダメだ・・耐えられない・・

結局 俺は硝子のマンションから大学に通い、硝子と一緒に生活を
始めた。

これが 属にいう同棲というものか・・

それまでの人生が嘘のように 秋の生活に張りが生まれた。

待っている人がいる

それだけで優しくなれる

秋との 生活・・

もうこのまま世界が終わっても良い

2人で夕飯を作り、食べる。TVを見たり、課題をこなす。2人で湯船に浸かり 身体を寄せ合ってベッドに入る。セックスをしない日も満足していた。

こんなままごとみたいな生活が 続くはずは無いと判っていたはずだ・・

あの 春の日 までは・・・

第八章 元彼女

判っていた。

そう 判っていたはずなのに・・・

2人が一緒に暮らし初めて三ヶ月が過ぎた頃。もう、2人での
のが当たり前になっている。

好きだとか、愛しているとか、お互い口にしたことなど無かったが、
そんなことどうでも良かった・・・あの日までは・・・

二人で暮らしはじめて季節は冬から春に変わっていた。

二人で、二回生の講義の準備を始めながら、選抜高校野球を見てい
た。

・ピンポン・・・

「ハ―イ」何も考えず、硝子はドアを開けてしまった。

・・・・・・・・・ヤバイ・・・

安奈がドアの外に立っているではないか。しまった。油断しすぎた。
取りあえず 彼女を中へ入れてはいけない。

「どうしたの？ 急に」 声は 普通に出てるよね？

「彼にも・・・先輩にも連絡取れないから、来てしまいました。すみ
ません急に押し掛けたりして・・・

私も 春から短大生なんですよ!」

「彼」・・・と言う言葉に、心が氷付いた。

「あっ お客様なんですね?」

玄関にある男もののNIKEを見て 安奈が微笑んだ。媚びた笑いだ。

「そっそうなの。前のスタバで待っててくれる?」安奈の好奇心をドアの外に押し出した時

「おい 硝子! シャンプーきれてるぞ!」

バスタオルで頭を拭きながらパンツ一枚姿の秋が、浴室から出てきた。

・・・今日は 厄日?

私は額に手を当てて 大きな溜め息をついていた。

見る見る内に 可愛い安奈の顔が、憎悪に歪む。

・・・ミスった・・・この娘のことは、忘れていた・・・仕方ないなあ・・・

逃げようとする安奈の腕を掴み、「入りなさい。ちゃんと話しましょう!」

私を見る目は、おぞましい物を見る目に変わっていた。

秋は、ジーンズとTシャツを着て テーブルの前にアグラをかいていた。

安奈をソファに座らせ 珈琲を入れる。

秋の匂いが溢れている私の部屋で 安奈の姿は 異質だった。

「じゃあ 私は出てるわね。二人で話した方が良いでしょう。」
突き放す言葉を向けた先は、秋なのか？ 安奈なのか？

・・・私は 嫉妬している・・・安奈の口から出た

「彼」 と言う言葉に・・・

「おい 待てよ」秋がすがりつくような目をして 助けを求めている。

「さっさと別れなかった秋が悪いんですよ。 こっちに振ってこないで・・・」

私は二人で決めたことに従うから」

突き放した様にいい捨て 硝子は自分の部屋を後にした。

「いつからなの？」

（いつからなんだろう？）

「私の事はもう好きじゃないの？」

（元から好きでも何でもないよ）

「あの人のことは 好きなの？」

（痛い所をついてきたな）

「黙ってないで 何とか言いなさいよ！」

プライドをズタズタにされた安奈の 夜女のような顔。

・・・あー鬱陶しい・・・ 何で コイツに色々言われなきゃいけないんだよ・・・

・・・ブチマケテシマエ・・・

「元から君の事なんて、好きでも何でもないんだよ。 付き合っ

くれっというから 付き合っただけだ。別に何の約束もしてないし もう一年程 連絡してないだろ。もう、自然消滅してたって事じゃないのか？ 今更 何も言うことなんて ないはずだろ。」

「・ひどい・・」

コレまで 振ったことはあっても 振られた事など無かった安奈だ。

「ひどいっただって。 君も 俺なんか居なくても 楽しくやってたんだろ？」

今更 言われたくないな」

冷たい秋が いた。氷のような視線が 安奈を射る。

「だったらあの人のことは どうなのよ？ すきななの？」 涙声になった安奈が はきすてた。

「アア・好きだというより愛してる・・アイツは 俺の湖だ・・」
秋の口から、自分じゃない人への愛を告げられる屈辱に安奈は耐えられなかった。

「絶対許さないから！」

夜叉の顔をした安奈が、硝子のマンションから飛び出てきた。

安奈はスターバックスのガラス越しに硝子を睨みつけ、中に座っている硝子に歩み寄り、

・・パン・・と平手打ちを放つ。

「絶対許さないから。」プライドの塊の女がそこにいた。

部屋に戻った硝子は秋の想いなど 気付く筈もなく「済んだ？」と聞いた。

「ああ 終わった。」

「そう・・・」

お互い何も言わない。

秋は自分の想いを初めて口にして、やっと硝子を愛している自分を自覚した。

・・・それでも、硝子には何も言えない・・・

安奈には言えた想い・・・なのに・・・硝子には言うことが出来ない。

けれど 新しい関係が始まる予感がした

第九章 告げ口

平穏な日々が続くと安奈の放った毒の事など忘れてしまう。

秋は今日も、いつものように硝子のマンションに帰って行った。

いつものように持っている鍵でドアを開ける。

「ただ・・・こんにちわ。」玄関には、黒い革靴とパンプス。明らかに年上の来客だ。

いつもは、秋が帰ってきたら玄関まで迎えに来る硝子の姿が無い。

そこには、険しい顔をした中年の男女が座っていた。

横には、今まで見たことのない消沈した硝子の姿。

何があったかなど、聞かなくても判る。・・・ばれたのだ。

キット、アイツが告げ口をしたのだ。

「篠原君だね。話がある。座りなさい。」

有無を言わさぬ威厳があった。怒りを極限まで抑えている重い口調だ。

「硝子と一緒に住んでいると言うのは、本当なのかい？」

「はい。そうです。」

「君達の恋愛に口を出す程 無理解なつもりは無いが、同棲とは・・・
いただけないね。どんなつもりでこんな事をしでかしたのかね？」
怒りの為 膝の上の拳が震えている。

「ハイ。御両親に、何の承諾も得ず一緒に暮らし始めた事につい

ては、申し訳ありませんでした。

僕達の先走りでした。もう少し 慎重になるべきでした……
……けれど、僕は硝子さんを愛しています。いつも一緒に居たい
気持ちは止められないんです。」

硝子の顔は驚きと恐怖の混ざったような表情をしていて、感情を見
出すことなど出来ない。

「何を言っているの？ 無責任にも程があります。あなたは男だか
らいいでしょうが、硝子は、女なんです。傷つくのは硝子なんです
よ!!」

母親だろう。 涙目になって必死で娘を守ろうとしている。

「硝子は、今まで何の問題も起こさず、優しい品行方正な娘だった。
大学も、私達親が望む以上のところへ入ってくれた。何の問題も無
い娘だったのだよ。」

君が……フー……硝子を望んでくれたことは、親として喜ば
なければいけないのかも知れないが 何故、卒業するまで待てない
んだね？」

「硝子はどうなの？ あなたは、篠原さんのことをどうするの？
どうして何も 話さないの??」

「亜紀子、そう怒らなくても……」

感情的になった亜紀子呼ばれた母親は、秋だけじゃなく、硝子にも
怒っていた。

「篠原君、君のご両親は このことは知っているのか？」秋にとっ
て 一番のアキレス腱だ。

「いいえ。母は五年前に亡くなりました。」

父とは殆ど連絡を取っていないので、このことは話していま
せん。」

そう話したとき、白鳥夫妻が息を呑んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・まさか・・いや・・そんな・・」

白鳥の目が 動揺している・・視線が定まらない・・

亜紀子の方を見つめ、アイコンタクトか？

亜紀子の視線が、俺を見つめている。しかし、先ほどのような陰悪さが消えたような気がした。

長い沈黙の後、父親の口から大きなため息が吐き出される。

「君は 篠原千明の息子か？」

白鳥の口から 思いがけず父親の名が出た。

「はい、父は千明と言いますが・・ご存知ですか？」

「いや・・・・・」

明らかに、2人の表情が変わっている。しかし、何故なのか判らなかった。

篠原と言う名に 驚いたわけではなさそうだ。

「取りあえず、今日は自分の部屋に帰りなさい。 私達も、硝子に聞かなければならないことがある。 もう一度、明日話したいから、ここへ来てくれるかな」

「はい 判りました。 では・・」

秋が私の部屋から出て行く。

追いかけたい・・・・・

「硝子。 あなた 彼が篠原電気の息子だと知っていたの？」

亜紀子がいつもの穏やかな口調で話し掛けた。

「ううん。 シノハラ電気って あの新ハラ電気？」

「そうだ。 彼は シノハラ電気の一人息子だ。 なんて言うことだ・・」

シノハラ電気は神戸を拠点に全国展開をしている大手電気量販店だ。

年収は何十億、いや 何百億だろう。

これまで一緒にいて 秋のことは何も知らない・

「信じられないわ。彼と硝子がなんて・・・」

「本当だ。」

硝子には、夫婦の会話の意味が見えていない。

何を話しているのだろうか？

「硝子 あなたはどうなの？ 彼の気持ちは判った。でも あなた
の気持ちは聞いていないわ？」

亜紀子が 硝子に向かって切り出した。

「そうだね。硝子はどうなんだ？ 彼は本気だろう。私達に、ああ
まで言い切れるには

余程の決心が必要だ。」

そう・・・私にも・・・本気が 見えた・・・

「お願いがあるの？ 今から秋と2人だけで話をさせて欲しい。私
達、お互いのこと全然知らなかった。だから、きちんと話をさせて
欲しいの？ お願い。」

硝子の素直な気持ちだった。

先ほどのまでの、びくびくしていた硝子はもういなくなっている。

凜とした硝子が ここにいた。

「判った。呼び戻しなさい。私達はホテルでも取るから・・・」

「ううん。お父さん達はここにいて。私が、秋の所へ行くから・・・」

秋のマンションは 東山の南禅寺の近くにある。

「もしもし 親父？」

「ああ、お前か？ どうした？ 珍しいな？」

「いや。ちょっと頼みがあつて」

「ほう。お前が頼みごととは珍しいな？ 金か？」

「いや」

「なんだ？ 言ってみろ？ お前の頼みごとなら大概のことは聞いてやるぞ？」

「マジか？」

「ああ」

「ふー 俺 結婚したいんだ？」

「何？ 結婚だと？」

「駄目ならいい」

「ちよつと待て。駄目だとは言っていない。 えらく急だな？ 出来たのか？」

「バカ 違うよ！ 認めて欲しいんだ

認めてくれたら、親父の会社 継いでやるよ。 ついでに結婚も認めてやる」

「・・・お前・・・」

「駄目ならいい」

「ちよつと待てって 相手は誰だ？」

「同じ高校から同じ大学にきた 白鳥硝子」

「（しようこ）・・・お前のことだから 俺が駄目だと言っても結婚するんだろうな

という事は、認めたほうが 俺の得だな。

近々その人も連れて神戸に帰って来い」

「ありがとう うん 来週にでも帰る」

「ああ 待ってる」

携帯を握り締め、篠原は目頭を抑えていた。

第十章 真実

人気の無い部屋と言うのは、こんなにも寒々しいのか・・
今まで独りでいることが 好きだったから誰もいない部屋に帰ることなど 他愛も無いことだった。

なのに、今は 虚しい・・

ここは 俺の居場所じゃない気がする・・

何ヶ月か前までは 普通にこの部屋で生活していたのだ

好きなものしかない部屋

でも・・一番 必要なものがない・・

冷蔵庫を開けても 案の定 何も無い (そりゃそうだ)

近所のコンビニでペットボトルのお茶と紅茶、缶ビールに鳥弁と花
籠弁当を買って自分の部屋に戻った。

「・・硝子・・」

ドアの前には、硝子が立っている・・

「ごめんね・・」

寒い部屋の中で、俺と硝子はベッドを背にもたれ、今買ってきた弁
当を食べている。

・・来るのがわかっていたのか？ まさか？ ・・

(俺は何も考えずに硝子の好きな花籠弁当と紅茶も買っていた)

「あのさ。さっき言ったことなんだけど・・」

「ちよっと待って。」意を決したかのように 硝子が話し出した。

「私の話を聞いて欲しいの．．そのあとに　もう一度、秋の気持ち
を聞かせて．．？」

「あの嵐の夜、秋は力ずくで私を陵辱したと思っているけど、違
うの。」

あのことは、秋が悪かったんじゃないのよ。．．私がそう仕向
けたの．．．

だから、秋が罪悪感や責任感を感じることもなんて無いのよ。

．．私が秋を欲しかったんだから．．．」

「知ってるよ。」

「．．え？．．．」何を言っているのか判らない．．次の言葉が出
てこない。思考がストップしてしまっていた。

「俺　初めから知ってるよ。あの雨の夜は、俺は自分の欲望に負け
たんだ。」

けれど、お前がそう仕向けたということはあの後すぐ知っていた。

」

（．．．どうして？　しってるの？．．）

硝子の動揺を　無視して、秋は話し続けた。

「あの後、お前が浴室に消えた後、無性に喉が渴いて冷蔵庫からペ
ットボトルの烏龍茶を出したんだ。そのとき、小さな赤い箱が一緒
に落ちてきた。何気なしに開けると、それはバレンタインのチョコ
レートだった。去年の日付の．．誰かに渡しそびれたんだな？と
思ってた。　もう一つの箱を見るまでは．．その奥に　もう一つの
黒い箱。．．その中には一昨年のチョコレートとカードが入ってい

た。」

そこまで聞けば、何のことが硝子には判っている。

（恥ずかしさと屈辱感で 一杯だ・・・）

「カードを見たとき、お前の企みに乗ってやろうと思ったんだよ。」
「さぞかし面白かったでしょうね？私が精一杯の強がりと言っているのを見て、楽しんでたんだ。」涙が 溢れてくるのを止められない。

――最悪だ。

一番知られたくない奴に、知られてしまった。もう顔を合わせられない。

むかついて、むかついて 周りにある雑誌や空のペットボトルを秋に向かって投げつけた。

バン バン

「おい。待てって。

待てってば。

落ち着け

な？

硝子？

落ち着け？」

暴れている私の 手首をつかむ。

押しのける。

何度も何度も振りほどき、押しのけても秋は私を捕まえた。

「放してよ。

帰るんだから。

放して・・・」

「落ち着けて・・・」

秋が私を抱きしめる。

キツクきつく抱き締めるものだから、息が出来なくなって私の体から力が抜けた。

「違うんだって。

な？

話を聞けよ？

な？」

「俺 それを見たとき

無茶苦茶

嬉しかったんだ。

俺がお前を見つけたときに、お前も俺を見つけてくれたんだ って」

秋の言葉は、私の鎖を解き放つ。

秋は、私を背中から抱きしめたまま、ベッドにもたれ大きな吐息をついた。

まるで 赤ん坊を抱くように 優しく包み込む。

「あの雨の日。レイプまがいの暴力で お前をねじ伏せた。

今 お前は計画的だったと言ったが、俺もそうだ。

俺は、お前がこの大学に来るというから、ここにした。離れたくなかったから・・・

それでもあの日から、2人の間が近くなっただけには確かだよ。だから、俺は悪いとは思わないと言ったんだよ。

・・・俺が高二のとき、転校してきた理由・・・知らないよな？・・・

「

私は 涙でぐしゃぐしゃの顔を横に振った。

「・・・俺の親父は、神戸で篠原って会社をやっている。

母親は、中二の時心筋梗塞で、俺の目の前で死んだ。

胸を抑えて苦しむ母親を見ていて、何も出来なかった。救急車を呼ぶことしか出来なかったんだ。救急車が来るまでの間に、親父の携帯に電話をしたが あいつは電話に出なかった。

大事な会議があるからと、前の夜遅く帰ってきた時に母に話していたのは知っている。

しかし、今は違う。母さんが死んでしまう。 どうして、来てくれないんだ。

今なら、親父が来てもどうにもならなかったということは、判る。

けれど、あの時はそんなことわからなかったんだよ。幼かったんだ。

俺は許せなかった。母を見殺しにしたような気がした。

母さんが病院で息を引き取った時 病室には俺だけしかいなかったんだ。

色々な手続きをしなくてはいけなかったが 俺には何も出来なかった。

親父に連絡がつかないから、俺は混乱の中で母さんの実家に電話をしていたらしい。

和歌山の祖父母がいつの間にか 俺の横にいた。

母さんの遺体を家に連れて帰ったのが、その日の夕方

親父は、その日の夜七時頃戻って来た。

白い布を被せられた母さんの遺体を前に 泣くでもなく立ちすくんでいた。

親父の秘書が 土下座をして誤っていた。

「申し訳有りません。 社長でないと対処出来ない事例があったため、奥さまの元におかえり頂く事が 叶いませんでした。 私の不徳の致すところでございます。」

額を床に擦り付けて、謝る姿にも俺の心は動かなかった。

「良いんですよ。頭を上げて下さい。」

娘から、今の篠原の状態がどういいうものなのか、知っているつもりです。

仕事を放り出して帰ること等 聖子は望まないでしょう。

貴方は貴方のすべきことをしたのだから、何を恥じる事がありますか？

このような事も、運命なんですよ。

千明さん？

貴方も自分を責めてはいけませんよ？

聖子は

受け入れていたんですから・・・」

親父が取り乱したのは、その時だけだった。「聖子・・・聖子・・・」
と妻に縋って泣き崩れていた。

それでも俺は、どうしても親父を許せなかった。

時は過ぎても、親父と俺の溝は埋まらない。

高校二年の夏 親父から再婚話を切り出された。 相手はあの時の秘書だ。

それまで、溜めていた親父に対しての鬱憤が噴き出してしまったんだ。

嫌だ！

勝手にすれば良い。俺も勝手にするから！ と言って家を出た。

N高から 転校したのはそんな理由からなんだ。・・・」

一気に 話して秋の体温が少し暖かくなった。

「お前が 俺の存在を目覚めさせた。

母さんが死んでから何をして、心は冷たいままで生きていく意味など無いように思えていたんだ。

けれど、お前が俺に火を着けた。お前のその人を見下したような態度が 闘争心を目覚めさせた。

高校で大学で 俺はいつも お前の存在を意識していた。

だから、お前以上に俺が硝子を欲していたんだよ。」

涙が溢れて止まらない。

秋の告白は私にとって 夢のような響きを放った。

心など手に入らない・・・ならば、せめて体だけでも欲望だけでも欲しかった・・・

「硝子？ 俺が嫌いかな？ 一緒に居たくないか？ お前が嫌なら、俺は諦めるから・・・」

涙声で、「諦めないで・・・」と聞こえた。

「私には秋しか居ない」

硝子の顔を上に向かせ 優しく口付ける。ついばむように、何度も何度も・・・

私達は その夜 何度も愛し合った。

今までの様な 戦いみたいな愛しかたではなく、慈しむように守るように・・・

秋は、その間に何度も

「愛してる」 と囁いた。

その都度 私の体には、いくつもの紅い花が咲く。

今まで 隅々まで知り尽していたと思っていた硝子の体が、新しい反応をする。

ここから愛し合うということが どんなに満たされるのか 初めて知った。

第十一章 運命

秋と硝子は お互いの想いを確かめあった日の朝

二人で硝子の両親の待つ部屋へ戻った。

「お父さん お母さん。 私達 やっぱり離れたくない。このまま一緒にいたい。」

「お前達の結論は判った。しかし、結婚前の娘を男と同居させるほど、私達は寛大ではないんだ。 同棲は、認められない。 同じ大学だし、近くに住んでいるのだから良いじゃないか？」

・・・最もな意見だ。

「僕は、今すぐにでも入籍したいと思っています。」

・・・「エッ」

俺以外の三人が、顔を合わせた。

「昨夜 父に結婚の承諾を得ました。

まだまだ若くて学生の身ですが、お願いします。 硝子と結婚させてください。」

秋の申し出に、硝子の両親は苦笑いを浮かべていた。

「やはり 篠原の息子と言うべきだな。無鉄砲な所はしょうこと一緒だ。」

俺の頭は ???? だらけだ。

硝子の顔は俺以上に、驚いている。

「君の両親と 私達は同じ大学で一緒だったんだよ。」

「・・・エッ・・・」

「・・・うそ・・・」

「あなた達は、小さい頃一緒に遊んだのよ。」

何だか信じられない・・・運命か？・・・

「篠原と私は同じ理学部で、亜紀子と聖子は教育学部だった。いつも四人で行動していたんだよ。」

卒業しても、私達はよく一緒に遊んだ。篠原と聖子が結婚した翌年に私達は結婚した。

君の秋と言う名は亜紀子から、硝子しょうこの名は君の母親の名前だよ。」

「でも、母さんはせいこですが・・・」

「そうだね。聖子の本当の名は、しょうこなんだよ。」

しょうこは小さい頃から心臓が弱くて、入退院を繰り返していたんだ。

呼び名を変えることで、運命が変わることもあるんだよ。

せいこに変えて、彼女は元気になった。けれど、彼女はしょうこと言う名が好きだった。

だから私達は、娘にしょうこと言う名をつけたんだよ。」

俺達二人は、顔を見合わせて、今聞いた信じられない偶然を噛み締めていた。

「秋君。君が父親を恨んでいることは、知っている。」

しかし、本当なら君は産まれてきていないかもしれないんだよ。

聖子は、元気になったと言っても、お産に耐えられる体では無かった。

篠原も、諦めろと何度も説得したんだ。

しかし、聖子は折角授かった命を殺すことなど出来ないと頑として受け付けなかった。」

「それにね、篠原君や主人は知らなかったけど、聖子自分達の代で篠原の血を絶やすことなど出来ないと考えていたのよ。篠原君

も一人息子で兄弟は居ないし、自分が跡取りを産むと決意していたみたいなの。」

・・・母さんが、俺を産むために命を縮めた・・・

「君を産んで、聖子は強くなった。病気とは縁がなくなったかに見えた。」

篠原自身もそう 思っていたはずだ。」

「だけど、彼女の心臓は 限界に来ていた。しょうこは知っていたはずよ。 自分の運命を・・・

私たちは、仕事の関係でしばらく日本から離れていたから、電話でしか話さなかったけど聖子は自分 分がいなくても生きていけるように、あなたを育てたはずだわ・・・キット」

・・・そうだ 母さんは俺に早くから自立を教えた。

世の母親は、息子にべったりとくつついているが、俺の母は小さい頃から、何でも自分で考える ように根気良く教えてくれた。だから俺は料理だって何だって自分ひとりで出来る。・・・

・・・俺の口から 嗚咽が洩れる・・・

「本当なら、こんな話は君の父である 篠原が話すべきだ。君が

篠原を恨んでいることは私の耳にも 入っている。しかし、彼ほど

聖子の事を愛していた奴は居ないんだよ。 聖子は自分には得られな

いだろうと思っていた息子を授けてくれて、最上の愛で守ってくれた篠原をとて愛していた。

篠原の会社の為に 自分に出来る事は無いかいつも 考えていた。」

白鳥の言葉に、衝撃を受けたのは秋だけではない。

硝子自身も、お互いの両親達が親友だったなんて思いも寄らないことだったのだ。

「秘書の真澄さんのことも、聖子の願いだったのよ。」

「エッ・・・そんなはずは・・・」

「真澄さんは先代の社長秘書をしていた。先代が会長になり、篠原が社長に就任するとき、真澄さんも会長秘書になるはずだった。しかし、聖子が会長に頼み込んで、社長秘書としてサポートをしてもらったんだ。」

その頃、篠原は経営とは縁の無い部所に配属されていた。

父親の七光りを嫌い、ただの一社員として篠原に勤務をしていたんだ。

先代は陰から息子の仕事振りを見ていたのだろう。

自分が会長になることで、未だ未熟な篠原に経営のイロハを叩き込むつもりだったのだ。

それを知った聖子が会長にお願いしたんだよ。せめて、真澄さんを側に置いて欲しいと。

自分は篠原の仕事のサポートは出来ないから、彼女にお願いしたいと・・・」

「・・・母さんが・・・」

知らなかった・・・あの人は、俺達から親父を取った人だと思っていた。

・・・だから、酷い事も言ったのに・・・

「聖子が亡くなってから、篠原は家に殆んど帰らなかったはずだ。」

アイツは聖子の望んでいた分野に手を伸ばした。

聖子が亡くなった頃『篠原』は存亡の危機に陥っていた。

先代が急死し、それまで見えなかった火種が大きくなり始めたんだ。

アイツは寝るまも惜しんで、仕事をしていた。

聖子の臨終に間に合わなかったのは、そういう訳があるんだ。」

「そんなこと・・・知らなかった・・・」

・俺・・・全然・・・知らなかったから・・・あの人に酷いことも言ってしまった・・・」

頭を抱えて、苦悩の表情をしている秋を　硝子は優しく抱いていた。

第十二章 運命の恋（前書き）

これで秋と硝子の物語は最終章です。

第十二章 運命の恋

白鳥夫妻から 語られた事実は 秋の心を洗い流していた。

今まで、恨み続けていた親父を許すことが出来た。それ以上に、自分の幼さに憤りを覚えた。

余りにも他人に無関心過ぎる。

俺は自分の事しか考えていない。

人の想いを受け止める事も、人の哀しみを思いやる事さえ 出来ない幼い心。どんなに勉強が出来ても、いろんな公式を知っていても、そんな人として一番大切なことが出来ない。

俺は、硝子の中に母を見つけたのか？

いや。硝子と母の資質は違う。

母さんには、桜の花の様な儚い潔い美しさがあった。今思えば、その潔さは自分の運命を知っている美しさだったのだ。

硝子は 蒼く深い湖だ。俺を俺の醜さも汚れも全て飲み込み、いつの間にか洗い流してくれる湖だ。

ただ、母さんが硝子と逢わせてくれたのだと思う。

運命の恋だと思う。

秋と硝子は 白鳥夫妻に結婚の意志を伝えた。二人の決意が変

わからないことを見た白鳥夫妻は、篠原に連絡を取った。

「白鳥か？ 久しぶりだな？ どうしてる？」

篠原の声は弾んでいるように聞こえる。

「本当に久しぶりだな？ お前も元氣そうじゃないか？ この間 TVの対談に出ていたじゃないか。」

「ああ。あれは、経団連の付き合いだ。ところで 何かあったのか？」

「ああ そのことなんだが・・・君の息子の秋君のことなんだが・・・」

「秋・・・か・・・昨夜久しぶりに電話があったかと思えば、結婚したって言うんだよ。」

アイツには、驚かされてばかりだ。ハハハ」

「実を言うと、その相手は・・・うちの娘なんだよ・・・」

「エッ エッ 娘？ 硝子ちゃんか？」

「ああ。そうなんだ。私も、昨日知ったばかりなんだが、秋君は硝子の高校に転校して来て今は一緒にK大に在学しているんだ。」

「・・・嘘だろ？・・・」

「俺も昨日は信じられなかったよ。こんな偶然があるなんて・・・」

「聖子が導いたんだな？ きっと・・・」

「ああ」

いつの間にか白鳥の口調が、親しみを込めたものに変わっていた。学生の頃からの親友同士の会話だ。

「白鳥 今日とは休みか？」

「ああ。今 娘の所だ。秋君も一緒にいるが。」

「調度良かった。これから こっちへこないか？ 俺も、今日は仕事が入っていないんだ。」

京都からなら二時間もあれば来れるだろう？ 」

どっちにしろ、来週には親父のところへ挨拶に行くつもりだったが、しかし急だ。

昔の親父は そうだった。

いつも急に思い立ったことをしようとして、母さんにしかられていた。

それでも、母さんはいつも親父の言うことを聞いていた・

篠原の実家は、芦屋の高級住宅地にある。

しかし、篠原自身も週に数日しか帰らず、息子にすればここ3年は家に帰っていない。お手伝いさんが、キッチンと掃除してくれていても、住む主が不在の家はやはり怪しい。

・・親父 まだあの人と一緒に住んでいないのか？・・
出迎えてくれた親父は、少し老けたみたいだ。 ・・俺達はこんなにも会っていないかったのか・・

「よく来てくれたね。さあ 入ってくれ。」

ラフな姿の親父が白鳥達を家の中に招き入れた。

綺麗に掃除が行き届き、男寡のわびしさは見当たらないが、暖かい空気がない。

「親父 この人が 白鳥硝子さん。俺が結婚したい人だ。」

「初めまして。白鳥硝子といいます。」

始めて篠原千秋に会うからと慣れないスカートをはいている。

「こちらこそ。初めまして 私が秋の父親です。息子が世話になってるみたいだね？」

コイツは我儘だから、大変だろう？ それにしても、硝子さんは亜紀ちゃん似だね？

白鳥には似てないな。」篠原はいつになく 饒舌になっていた。

「親父 あの人？」秘書の真澄の事をいつている。

「ああ 今は仕事ではないから、来てもらってないんだが・・・」
瞳の奥に少し悲しそうな雲が浮かんだ。

「呼んで欲しいんだけど？」

「エッ」

「そうだな。真澄さんにも、久しぶりだから挨拶したいし・・・」

篠原。悪いが彼女を呼んでくれないか？」

白鳥も 秋の決意を汲み、助け舟を出した。

昨夜の電話で、秋が親父の結婚を認めると言っていたが、篠原には本気なのか未だ信じ難かった。

・・・そのことが篠原親子の確執となっていたのだから・・・

「休んでいるところすまない。急で申し訳ないんだが、今からうちに来てくれないか？」

ちよっとお客さんがあって、おもてなしが出来ないんだ。

お手伝いさんも今日は、休んでいるから・・・ 仕事じゃないのに・・・すまない・・・」

遠慮がちに真澄に電話をしている千秋に秋は腹立たしく思えた。

・・・どうして 親父は彼女にそんな余所余所しい態度を取っているんだ？

彼女と結婚するって言ってたじゃないか？ 大人なんだから

俺がどうこう言っても

一緒に住めばいいのに。 何なんだよ？ 何かむかつく・・・

秋の眉間に怒りが表れたのを硝子だけが気付いていた。

「お茶でも入れますね？ 秋？ カップとか何処にあるか教えて？」

さりげなく、硝子が秋をリビングルームからキッチンに呼び寄せた。

「どうかした？」

硝子に正面から見据えられて、秋は戸惑い自分の中に生まれた憤りを吐露した。

「もう、本当に秋って子供ね？ 何もわかつちやいないんだから・

」

秋の胸の内を知った硝子は、呆れた声でため息をついた。

「何だよ？ どうして俺が子供なんだよ？」 拗ねたように剥れていじけている。

・・・かわいい・・・

「クスッ。 やっぱりお子ちゃまだ。

お父様も真澄さんも、あなたの気持ちを第一に考えていらっしやるのよ。

キット、お母様の時の蟠りがあなたに残っているのを、お父様達は気付いていらっしやるの。

だから、あなたの心の氷が解けるのを待ってらっしやるのよ。」

自分の思い通りにならないもどかしさ。
自分のせいで親父の幸せを邪魔していることに心の底では気付いていた。

だから、腹立たしかったんだ。 自分に対しての憤りだったんだ・

硝子に言われて気付くなんて、子供だと言われても仕方ない

「でも、今日でちゃんと認めるでしょ？ 2人のこと」

「ああ もちろんだ。それにちゃんと謝らないとな」

「うん。 偉いぞ。」 そう言って硝子は 自分より背の高い秋の頭

を撫でた。

「バーカ。子ども扱いするなよ。」

「だって 子供だもん・・・」

「何だと?・・・」

秋は後ろから襲い掛かり、硝子を羽交い絞めにした。

「それでも、子供かよ?」

うなじにキスの雨を降らせる。

・・・だ・め・

ガチャン カップの割れる音

走りこんできた亜紀子は呆れている。

「もう、2人とも大人なんだから、お茶ぐらいちゃんと入れなさい。」

「「はい。すみません」」

と2人でハモッてしまった。

ははははは

暫くして、色んな和菓子を詰め合わせた菓子折りと小さな花束をもつて、真澄が到着した。

急なお客様だと言うことだったので、取りあえず見繕ってきたようだ。

やはり、この人は篠原のパートナーだ。

「秋さんだったんですか。お久しぶりでございます。 お元気そうで・・・」

白鳥様もお元気そうで・・・ご無沙汰置いたしまして申し訳ありません。」

真澄は白鳥夫妻と親しみを込めた挨拶をしている。 やはり、昔からの知り合いなんだ。

真澄は、持ってきた和菓子を取り分けながら、秋の知らないところから緑茶のセットを出して
六人分のお茶を入れてくれた。

・あつ・・・と真澄が躊躇したのは、その所作を秋に見つめられていたからだ。

自分の家のように振舞ってしまったのか？・・・

フロアリングに膝をついて、お茶を出す真澄の手元が震えていた。彼女にとって 秋の視線は針のように感じていたのだ。

「真澄さん。すみませんでした。俺。ずっとバカなことばかりしていて、あなたを困らせてばかりだった。随分酷いことも言っただ。本当にすみませんでした。」

あなたのことを、母さんとは呼べないけど、親父のこと 頼みます。

それと、俺とこいつのことも 宜しく頼みます。」

秋は 頭を床につけて謝っていた。

事の成り行きが見えていなかった真澄は 一瞬きょとんとしていたが、すぐに

「秋さん ちょっとやめてください。頭を上げてください。」

社長 秋さん やめてください。」

篠原は、秋の姿に我を忘れて感動してしまっていた。

「秋 もう良い。真澄もわかってきている。お前が認めてくれるまでこのままでいよう」と

2人で決めていたんだ。お前がこうして許してくれるんなら真澄君もキット篠原の人間になつてくれると思うよ。」

真澄は 篠原の横で膝に顔を埋めて号泣していた。

「硝子さん。ありがとう。秋がまた私たちのもとに戻ってくれた。君のお陰だ。」

こいつは、自分で思っているほど冷たい人間ではないんだ。

本当は、燃えるような激しい心をもっている。けれど、それを押し殺すようになってしまったのは、私たちのせいだ。大人びて落ち着いているからと誤解して 私は自分の悲しみを癒すことだけに時間を費やしてしまった。 まだこいつは十四歳になったばかりだったのに・・・

私は、秋に甘えていたんだ。 秋が、冷たい視線を私に送っていることに気付きながらそれを無視 していたんだから・・・

昨日 久しぶりに聞いた秋の電話の声は 以前の優しい息子の声だった。

ぶっくらぼうだけど、優しい秋の声だった・・・

篠原は 真澄の肩を抱きながら 告白していた。その篠原の声も涙声に変わっている。

「親父、俺は11月から硝子と一緒に暮らしている。 もうこいつ無しの生活なんて考えられないんだ。 俺はもう独りになりたくない。 だから 結婚を認めて欲しい。頼む。」

「お願いします。」

秋と硝子は 前にいる四人の大人に向かって頭を下げた。

白鳥夫妻と 未来の篠原夫妻はお互い顔を見合わせ 首を縦に振った。

「必ず大学は 卒業しろよ？」

「もちろんだ。 卒業したら2人で篠原に就職させてくれよ。」

「ああ。頼む。」

＊＊ エピローグ ＊＊＊

新緑が眩しい季節

「ねえーちよつと。英明？聞ってるの？ 秋と硝子が結婚するって本当なの？」

香音が 携帯で怒鳴っている。

「聞ってるよ。そんなに怒鳴らなくても聞こえてるって・・・」

「美夏ね？本当なのね？結婚」

「そうみたい。硝子がちゃんと話したいからってみんなで逢うんだけど、香音に合わせて日を設定 するから、こっちにいつ戻れるの？」

「もう明日帰るわよ。そんなことなら、明日仮病を使うから。もう信じられない・

場所と時間決まったらメール入れておいて。 ね！キットよ！
じゃあ今からオケの練習だか ら・・・」 ブチっと一方的にき
つてしまった。

・・・はー・・・

美夏の横では 英明がオロオロしている。

「明日、難波のがんこで部屋取るよ？ 良いね？」

「うん 了解。俺今から電話入れるよ」

もう、男なんだから、しっかりしなさい。

英明は香音に怒られるとシュンとしてしまう。香音も面白がって英明を苛めるのだ。

しかし、 秋と 硝子が結婚とは・・・あの秀才同士が・・・ね・・・

翌日の 午後6時 難波のがんこの前には
英明と美夏がいた。

「やっぱり、香音は遅刻だ。」 英明がぼやく。

そう 香音は遅刻魔なのだ。大概、三十分は遅刻すると見ている。

「お待たせ！」秋と硝子が やってきた。

ちよつと ちよつと どうしたのよ？ 硝子の雰囲気全然違うよ？
名前と同じガラスの破片のように 研ぎ澄まされた感じがなくなっている。

わお 秋もだ！！

氷のような冷たい瞳が、澄んだ優しい光に満ちている。

何なんだよ？ これが恋って言うもの？ 信じられない・・・

「やっぱり、香音はまだなんだ？ 先に入るか？」

英明は個室を予約していた。

「英明 偉い！」そう、英明は段取りに関してはぴか一だ。

まず、生ビールで乾杯をして、適当に見繕って注文する。

「硝子 どういうことよ？ 結婚って？ いつから付き合っていたの？ 何で言わないのよ？」

「ごめんね。 ちよつと色々あって・・・」

硝子が秋の肘をつつく。

・・・おーなんだ？ この雰囲気は？・・・英明とて 2人の親密感に圧倒されていた。

「俺と硝子は、去年の十一月から一緒に住んでたんだ。」

「・・・エエー」目が点になる。

「この春に、元彼女にばれて親に告げ口されたんだ。それで一揉めあって、親の了解が取れたから

結婚・・・ということになったんだよ。」

照れた秋は 変だ！ 何か可愛い・・・可らしい・・・

「そうなの。うちの母親が同棲だけは認められないって頑固に言うもんだから・・・」

私 もう 篠原硝子なの・・・へへ・・・」

・・・??・・・

「何がへへ・・・よ。信じられない・・・」

「ごめんってマジごめん。こんなことメールじゃ言えなかったのよ。」

「みんな早いね? あっ 生大ジョッキでね!」

通りがけに店の子に注文をして、香音が入っていた。

「ちよっと、硝子どういうことよ?」

・・・また 最初からだ・・・ふー・・・今夜は帰れないぞ・・・

しかし 硝子と秋の親密感は何なんだ? 恋って 偉大なんだな・・・

第十二章 運命の恋（後書き）

次作は この五人グループの物語を書きたいと思います。また、読んでくださいね。

番外編 復讐（秋）（前書き）

秋と硝子の番外編です。

硝子達に出逢う前の 秋の過去の話です。元々 社交的ではなかった秋が より人を寄せ付けなくなった原因。 父親との確執。

番外編 復讐（秋）

俺は 親父を憎んでいた。

母さんを見殺しにした親父を 困らせてやる事が俺の生き甲斐だった。

ただ それだけが 生きている証だったんだ。

俺は いつからか独りで居ることが 苦痛でなくなっていた。
親父は、仕事仕事で殆ど家には居なかったし、母さんはボランティア活動で昼は留守がちだった。

...

母さんと親父は、大学の同級生だった。大恋愛の末、結婚したと聞いた。

幼い頃から、母さんは俺に色々なことを教えてくれた。勉強は勿論のこと、家事全般にも俺が興味をもったことには殆どと言って良いぐらい挑戦させてくれた。

包丁を使うことも、火を使うことも、洗濯機使い方や畳み方、全て母さんから習った。その頃、親父もまだ仕事はそんなに忙しくなく、休日にはキャッチボールやサッカー、釣りも親父に習った。

海外にも、よく連れて行ってくれた。勿論、観光がメインだが、その国のスラム街にもまだ小学低学年の俺を連れて行った。そして、

其処に住む子供達とあそばせたりもした。

その頃の俺には、何故母さんがそんなことを経験させるのか全く判らなかったが、世界中に友達が出来ることが嬉しかったんだ。

母さんはユニセフのボランティアをしていた。よく家を空けて、家のことは家政婦さんに任せっぱなしだった。そのことに、俺の小学校の担任は、あからさまに嫌な顔をしていた。

子育てを放棄している無責任な母親だと。自分達の常識の範囲内から外れているからだろうか。

けれど、小さい時から海外を見せ、漠然と大人と子供の世界の差を感じ取り、父親の姿に自分を重ね、いつかは父親の様に世界を見据えた仕事をしていきたいと思っていた。

俺にとって、小さな島国の常識なんて糞くらえだった。

留守がちな母さんでも、俺の起きている時間には必ず帰宅していたし、学校のことや友達関係を相談するのは、もっぱらそのときだった。

家政婦さんは、6時になると帰ってしまう。誰も居ない家に独りで居る時間、TVやゲームで時間を潰していたが、すぐ飽きてしまう。だから、俺はその時間を勉強に費やしたんだ。初めは、母さんが買っておいてくれた本を読んだ。

本は、ゲームより面白かったしTVよりも楽しかった。だから、こんな世間的には歪な家庭でも、俺はぐれなかったし、ぐれるほど莫迦でもなかった。離れていても、両親は俺を愛していたし、俺も両親が好きだったから。

中学受験をすることは、ただの暇つぶし以外の何者でもなかった。勉強は、楽しかったし、難しい問題は、次から次へとあったから。

判らないことを教えてもらう為に、塾に行った。知識を吸収することが、とてつもなく楽しかった。昨日知らなかつ

たことが、今日解る。自分の中の引き出しが増えていく。N中学に入ったのは、あの地域で一番知識を教えてくれるからだ。

俺が、受験をすると決めてから、母さんは泊まりの仕事も受けるようになった。

それまでは、俺のことを一番に考えていてくれたからだろう、朝食は必ず三人一緒にとっていた。

俺が、自分の手元から飛び立とうとしていることに気付いたんだらう。

小学校の担任が、どんな目で見ようとも俺は自分の両親が大好きだった。

すれ違っても、普段一緒に居なくても母さんと親父は愛し合っていた。

お互いのことを一番信頼していた。・・・あのときまで、本当にそう思っていたんだ・・・

・・・

俺が親父を認めなくなったのは、母の死がきっかけだった。

いつものように、母と朝食を取り普通の会話をし、この日は出かける時間が同じだからと母の車に同乗することとなっていた。

待っても待っても二階から降りてこない母に業を煮やして

「何やってんだよ。遅刻するぞ。」と、階段を昇っていくと二階の踊り場で母は倒れていた。苦しそうに胸を押さえ顔は般若のように歪んでいた。

「母さん！」

母さんが手に持っていた携帯電話で救急車を呼び、すぐに親父の携帯に電話を掛けた。しかし、親父の携帯は留守電になっている。やむ終えず親父の会社に電話を入れた。

しかし、あいつは出なかった。早朝会議の真っ最中だったのだ。

救急車で家の近くの市民病院に運べれたが、病院に着いた時は既に心肺停止状態だった。苦しそうな顔が、いつものマリア様のような優しい笑みを浮かべていた。

初めての死を目の前で見せられて、自分がどんなに無力で何も出来ない子供だと思い知らされ、立っていることすら不思議だった。父に、何度連絡しても連絡がつかず、仕方なく母の実家に電話を入れ、祖母が飛んできた。

中学三年の春だった。

父が顔色を変えて家に帰ってきたのは、その日の夕方だった。

呆然とははの横に立ち竦む親父の姿に、何の感情も持たなかった。

親父が帰ってくるまで、罵ったり恨み言を言うか殴りかかるかと思っていたが、親父の顔を見るなりその感情は外に出るではなく、胸の奥深く埋もれてしまった。深く暗い水溜りとなって。

親父の後にやってきた秘書が土下座をし、謝罪の言葉を口にしても俺の心の底には届かない。

「申し訳ありませんでした。どうしても社長でないとやり過ぎせない取引先とのトラブルが起こってしまい社長の時間を作ることが出来ませんでした。申し訳ありません。何とお詫びしていいか・・・」

グレーのスーツに身を包んだ女性が白い布を顔に被せられた母に向かって土下座をしていた。

母の横に座っていた祖父母は、涙を溜めた瞳を彼女に向け「判っています」と応えた。

「今の「シノハラ」がどういう状況か娘に聞いて判っているつもりです。仕事を放り出して帰ってくることを聖子は喜ばないでしょう。」

千明さんには感謝しているんですよ。」

俺の知らないことが、俺の頭の上を通り過ぎて行く。

『シノハラ』は先代の社長、俺の祖父が一代で造り上げた会社だ。強烈なカリスマ性で事業を展開し、小さな街の電気屋を全国規模の『シノハラ』になしえたのも彼の先見の明と畏れを知らぬ行動力のたわものだった。

父は「シノハラ」に入社したが、技術屋として新製品の開発に関わっていた。会社では極力、社長と顔を合わせず一部の幹部だけしか、真が御曹司だとは知らなかったのだ。

父が入社して十年が経ち、真が開発に関わってきた新製品が目星がついた頃、社長は真を社長に抜擢した。まだ、親父は三十四歳になったばかりだった。

祖父は会長に退き、「シノハラ」を親父に譲ったのだ。

しかし、それまで営業に全く関わっていなかった親父に社長職の荷は重く、学ぶことが多すぎた。

祖父の秘書をしていた女性が親父の下に残った為、彼女と祖父の腹心の部下である常務が教育係りとして親父をサポートしていた。

親父が最大の窮地に落ちいったのは、祖父の急死だった。まだ還暦を迎えたばかりの若すぎる死。動脈瘤破裂による出血死。呆気ないほどの急死だった。

其処から「シノハラ」の低迷期が始まった。

業績が落ち込むと、不満分子が沸々と沸いてくる。その張本人が祖父の弟である専務である。

専務は、業績の悪化は二代目社長にあるといって、他の役員を丸め込み、真に社長を退くように迫っていた。それを阻止したのが、真が開発に関わっていた新製品の発売だった。母が所属している世界的なボランティア団体が、その商品を使い開発途上国でのしかし、

今から思えば、あの頃 親父は殆ど家には帰ってこなかった。帰りたくても帰れなかったんだろう。

けれど、それを解れるほど俺は大人ではなかった。

自分の苛立ちを、人に当たる位しか出来ない無知な莫迦な子供だったんだ。

母を亡くしてから、親父は今まで以上に仕事に没頭していった。

俺は、母親の居ない家に帰ることが出来なくなってしまった。今までも、家を留守にしていた母だったが、俺にとっても親父にとっても彼女の存在はあまりにも大きかったんだ。

俺は、その頃女の身体を知った。そして、誘われるまま何人もの女と大人の関係を結んだ。きちんと付き合った女もいたし、一夜だけの関係もあった。けれど、どんなに関係を持っても心の渴きは癒

されない。 そんな時……

親父からある女性を紹介された。 高二の夏だった。

その人は、親父の秘書だった。彼女は仕事に追われ婚期を逃していた38歳の人だった。

感じの良い人だったが、再婚したいと言われて認めるわけにはいかなかった。 許せなかった。

どうしても、認めるわけにはいかなかった。

「好きにすれば良い。俺も好きにするから。勝手にすれば良いんだ。けれど、俺は認めない。」

俺は、家を出て母の実家に身を寄せた。

そこで……硝子……お前に出逢った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2178b/>

三日間

2010年10月9日16時56分発行